

川下の風景①⑨

～人生は川の流れるように～

米津 達也

【初めてのフルマラソンはドラマチックだった】

2025年11月2日秋の快晴。初めて挑んだフルマラソンはドラマチックだった（普段、“人生はドラマじゃない”というコラムを書いているのに）。

42.195kmを走るために、7月～10月に積み重ねた距離は764km。所謂、ランナーという人から見れば少ない距離だ。10月半ばに最長距離で走れたのは28km。それも後半は脚が痛くて、歩く始末。レースまで半月、ハーフ走のタイムは2時間40分。本番の制限時間は5時間5分だから大幅オーバー。この時点で、まあ無理だろう、来年リベンジしよう、と遠すぎた42kmを囁みしめていた。

レース本番3日前。担当している授業でサプライズがあった。授業が始まる前に、学生の皆さんがホワイトボードにイラストとメッセージを記載してくれた。そういう背中への押し方をされたのは初めてだった。どうリアクションして良いかわからないが、その時に決めたのは「覚悟」だった。まあ、来年、という気持ちではなく、たとえ関門閉鎖に間に合わなくとも、ゼッケンを外してでも、這ってでも、ゴールに辿り着くという「覚悟」だった。

レース本番。緊張も気負いもなく、集団後方からスタート。5kmほど走った感じで、漠然と行けるだろうという確信があった。なんだろう、この安心感。練習は常にひとり。レースでは、大勢のランナーと共に走るという安心感に似たものがある。18km、脚の痛みを備えて痛み止めを服用。30km、オーバーペースだったランナーが歩き出す。腕時計が刻むペースを注視し、ひたすら同じペースで走り続ける。35km、用法用量を守らず痛み止めを囁み砕く。これも学生から頂いたものだ。沿道の応援がただただ有難く、元気をもらえる。最後まで走り続けて、42.195kmを完走。初マラソンは4時間48分。無事、制限時間内にゴールできた。かつて、野口みずきさんが「走った距離は裏切らない」という名言を残しているが、ゴールして思ったのは、本当にそうだったな、としみじみ感じた。

私は普段、あまり他者と共に何かを成し遂げるということをしてこなかった。ひとりでやる方が早く、他者とペースを合わせることを億劫に感じてきた。仕事においてはチームマネジメントが必要なのでそうもいれないが、それでも信頼するという気持ちがあったか甚だ疑問だ。学生とのコミュニケーションもそう。12年も同じ科目を担当しているが、毎年、学生は変わるとは言え、彼らとどれだけ言葉を等しく交わしてきただろうか。そういう他者と自分との関係性において卑下してきたようなことが、この夏の積み重ねと42kmの行程で大きく変化したような気がする。ひとりでは見られなかった世界がそこにある。

【世の中の流行りごと】

外回りをしていると、最近よく見かけるようにな

ったのが、「買取〇〇」という質屋の出張ブース。

スーパーの入り口に陣取り、行き交う高齢者に盛

んに声を掛けて「自宅に不用品ありませんか？」

と熱心に営業している。折しも世の中は物価高。年金暮らしの高齢者にとって、家のタンスに眠っている古いブランド品や装飾品は過去の思い出。終活ブームの意識も高まり、生きているうちに処分できるものはしてしまおうか、と若い営業社員に声を掛けられれば世間話程度から足を止めてしまう。欲しているのは、お金だけでなく社会交流でもあるのだ。もちろん、買取業者も時代遅れのブランド品や装飾品に端から興味はなく、そんなものは二束三文で引き取り、網を広く張って、高価で売れる金などの類を探り当てているのだろう。私から見れば、手当たり次第に高齢者に「オレ、オレ」と電話を掛けている状況とさして変わらないように映る。

ケアマネジャー不足と言われ始めて久しいが、時折、人材紹介会社を通じてケアマネジャー求職者の紹介がある。人材紹介会社を通じて採用すると、当然、紹介料を支払う。職種や契約によってまちまちだが、おおよそ年収の20～30%といったところか。面接したケアマネジャーであれば、紹介料として60～70万支払うことになる。こうなると、採用ハードルも上がるし、今、人材に困っているわけではないから、そこまでコストを掛けて採用する必要がない。これは、逆を言えば70万掛けてでも、今すぐケアマネジャーが欲しいと思う事業所があるということだ。そんな事業所は大抵、慢性的な人材不足、つまり定着率が悪い。求職者からすれば、安易に登録したのかも知れないが、結果的に人生の選択肢を狭めていることを理解しておくべきだ。優良事業所は人材紹介会社に多額の紹介料を支払ってまで採用しようとししない。テレビCMでは盛んに「転職エージェント」が云々とキレイごとを言っている。そこにビジネス、お金が介在する限り、本気で他人の人生を考えてくれる人などいない。それを分らず、自分の価値

をエージェントに委ねているというのは大リーガーにでもなったつもりだろうか。

人生の選択に、将来の正解、不正解を予測することなどできない。それは今現在の「正解」であって、10年後の「不正解」であるかも知れないわけだ。それだけ私たちは大なり小なり、様々なことを選択して生きている。だとすれば、大事の時だけ他人に人生を委ねず、常日頃から自分の考えをしっかりと据えておくことが懸命だと思う。そうすれば、あてにならない社会の流行りごとに右往左往することもないだろう。

【ドラマチック】

「家族愛」「夫婦愛」「兄弟愛」「仕事愛」「組織愛」など世の中は沢山の愛が溢れているが、私はどれも信じていない。愛していないわけじゃない。安く使われる言葉が嫌いなのだ。毎年夏休みの終わりに放送される「愛は地球を救う」というのも、愛が地球を救えるかどうか、人を救えるかどうかは問題ではなく、「愛で救おうぜ」という包括的な総合的概念に共感が持てない。

先日、週1回の講師業で京都に出向いたが、少し早く到着したので大衆的なカフェで軽食を取った。街は外国人だらけだが、店内は意外に空いていた。席に座って珈琲とサンドイッチを食べていると、店内が割に静かなものだから、隣の男女の会話が勝手に耳に入ってくる。カップルと言っても、私より少し年上っぽい落ち着きだが、そこに婚姻関係があるのかどうかは分からない。本を片手にとっていたが、意識が一度そちらに取られると、手元の活字に戻すのは難しいし、やや薄暗い店内では、残念ながら老眼が少しずつ進んだ眼では思うように文字を追えない。そこで、聞くことなしに隣のカップルの会話を聴いていた。

男性が主に会話の主導権を握っていて、女性は彼の話に割に熱心に耳を傾けている様子だ。彼は彼女に対して「お前は」と繰り返し、かと言って罵倒しているかと言えばそうでもなく、「お前はそうだから、俺が守ってやってるんだ」という趣旨を刻々と語って聞かせる。

私も我が子や、気の知れた後輩に対しては知らず知らずに「お前」と言っているが、こうやって客観的に聞かされるとだんだん腹が立ってくる。その言葉が私に向かっているわけでもないのに。会話の雰囲気からすると、モラルハラスメントっぽいし、どこか抑圧的、洗脳的にも受け取れる。「失礼ですが、あなた騙されてますよ」と言ってあげたいところだが、他人の男女の仲に入るほど野暮なことではない。お互いにそれで関係を維持されているならそれで良いとも思う。しかしまあ、言葉とは不思議なものだ。時に人を傷つけ、騙し、時に人を励まし、行動を勇気づけ、人と共感し、時に大衆を扇動する。眼に見えないくせに魔法のようなものだ。

「家族愛」という総合的概念的言葉は、あたかも正論で、世の中の理想論で、誰もが共感し分かち合えるからこそ、私は疑っている。「家族愛」で救われた人々、幸福である人々も多い。一方、それに抑圧され、拘束され、不幸に貶められる人もたくさんおられるはずだ。福祉援助職に就いていると、そんな家族とはたくさん出会う。繰り返すが、救われている人はたくさんおられる。素晴らしい家族も多い。しかし、それを「家族愛」という総合的概念的な言葉で一括りにして良いとは思わない。上手くいってる家族も、上手くいかない家族も、そこには葛藤やストレスや努力や称賛されることなど、個別性の高い事象が盛り込まれているはずなのだ。

先のカップルもそうなのだろう。私を知る以上に、

二人にはドラマがあるはずだ。機会があれば知ってみたいと思う。どんなドラマも退屈なことなどないのだから。

2025.11.25 米津達也